



安心安全な地域社会の構築に向けた災害経験を「伝えて、学ぶ」地域連携の取組 : その3

山地, 久美子

(Citation)

神戸大学都市安全研究センター研究報告, 24:127-146

(Issue Date)

2020-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81013265>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013265>



安心安全な地域社会の構築に向けた 災害経験を「伝えて、学ぶ」地域連携の取組 その3

Actions of Regional Partnership to Realize a Safe and Secure Society Passing Down the Disaster Experiences to the Next Generation/Others and Learning Part III

山地久美子
Kumiko Yamaji

概要: 阪神・淡路大震災の被災地、兵庫県に位置する神戸大学ではその経験を学術研究の知見として蓄積し、南海トラフ巨大地震や豪雨水害等の自然災害対策へ活かすべく様々な形で教育・研究に役立ててきている。神戸大学地域連携推進室のCOC+事業(地〔知〕の拠点大学による地方創生推進事業)では安心安全な地域社会領域において都市安全研究センターを活動主体の中心として継続的な取組を進めている。

2020年には新型コロナウイルス感染症が世界的に猛威を奮い、危機管理の観点からも「新しい生活様式」をはじめと新たな取組みへ対応しうる能力、体制づくりの重要性が再認識された。本稿では「伝えて、学ぶ」の取組の3年目、最終年度として実施した地域連携事業の概要並びにニュージーランドより招聘した研究者と取組んだ国際研究共同プログラムとそこから得た知見と課題を報告する。

キーワード: 安心安全な地域社会、地域連携、国際的視点、神戸大学都市安全研究センター、神戸大学地域連携推進室、COC+事業(地〔知〕の拠点大学による地方創生推進事業)、

1. はじめに

兵庫県に位置する神戸大学は、阪神・淡路大震災の災害復興経験を続く東日本大震災、熊本地震、豪雨等の被災地へ伝えるとともに、新たなステージに対応した防災・減災を学んでいる。

神戸大学地域連携推進室ではCOC+事業(地〔知〕の拠点大学による地方創生推進事業)の中で「地域創生に定める実践力、養成ひょうご神戸プラットフォーム事業」5領域(歴史と文化、自然と環境、子育て高齢化対策、安心安全な地域社会、イノベーション)の一つとして安心安全な地域社会の構築に取り組んでいる。

防災・減災が日常の当たり前の取組として求められてきている今日、より有効な対応力を身につけ、事前に復興のあり方を探る必要がある。そのため安心安全な地域社会領域では都市安全研究センターと協働して、地震、津波、水害、噴火等、災害の性質とメカニズムを学ぶ場を提供するとともに、ボランティアやまちづくりの実践的手法を身につけ、防災意識を地域で啓発できる人材を育成している。

その活動の一つに「地域の安心・安全に向けた『伝えて、学ぶ』」（表 1）がある。これは災害対応にかかる知識、新たな知見を社会の現場にでて習得し、教育・研究・実践面で役立つ取組である。文部科学省の COC+事業最終年度にあたり、2019 年度は人材育成に繋げるよう災害体験者との交流に重きを置いた。なお、活動の一部にはニュージーランドから招聘した研究者と取組んだ国際共同研究プログラムが含まれている。

表 1 地域の安心・安全に向けた「伝えて、学ぶ」取組

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 阪神・淡路大震災の被害・復興経験を再検証し、防災・減災に役立てています。② 阪神・淡路大震災後に発生した被災地から学び、新たな知見を得ています。③ 研究の知見を教育、実践活動に活かし、兵庫県内、国内外へ伝えていきます。 |
|---|

2. 「伝えて、学ぶ」こととその実践活動

安心安全な地域社会領域では防災・減災意識を高める機会創出の場として、学生、教職員、市民、被災者、支援者らとともにフォーラムやゼミナール、意見交換会を開催している。プログラムでは阪神・淡路大震災や東日本大震災被災地での住民交流やまちあるきを通じて、災害復興の現状を学び、今後の課題を共有すると同時に教育、学術研究へと繋げてきている。

2019 年度には「伝えて、学ぶ」の座学の取組として「兵庫の防災・地域連携フォーラムⅢ」、テキスト『災害から一人ひとりを守る』の執筆者による連続講演を開催した。アクティブラーニングの活動としては、「見て歩き会／EXTENSHON」を阪神・淡路大震災被災地（兵庫県神戸市／淡路市）において実施した。東日本大震災被災地での取組では宮城県南三陸町において都市安全研究センターオープンゼミナール東北版と住民との意見交換会を地域の皆さんと協働で開催した。そこでは人々の想いを伺うと共に災害の語り継ぎ活動から 10 年目を迎える被災地の復興の現状と課題を学んだ。

プログラムの特徴としてニュージーランド・カンタベリー大学より招聘した外国人客員教授との国際共同研究が挙げられる。ニュージーランドでは 2010 年から 11 年にかけてカンタベリー地震と呼ばれる 4 つの連続した地震が発生した。カンタベリー大学は 11 年 2 月 22 日に発生した 2 つ目の地震の激甚被災地クライストチャーチ市に位置し、その経験から災害復興を学術・実践の双方からけん引している。東日本大震災とほぼ同時期に発生したカンタベリー地震との比較研究は社会・文化・政治体制の災害復興、防災・減災への影響を考察する有効な機会となった。

次にこの 1 年間の取組とプログラム概要、知見の一部を紹介する。なお、参加者の感想、コメントの抜粋と紹介新聞記事の一覧を文末に掲載する。

3. 兵庫の防災・地域連携フォーラムⅢの開催

(1) 「これまでの取組／まとめ」－実施の経緯

1995 年に起こった阪神・淡路大震災は阪神大水害とならび、兵庫県の災害対応の基礎となる災害である。COC+事業の最終年度にあたり、兵庫の防災・地域連携フォーラムⅢ／神戸大学都市安全研究センターオープンゼミナールにおいて都市安全研究センター長より耐震工学分野の視点からの講演、神戸新聞社報道部長より阪神・淡路大震災後の新聞報道と人材育成にかかる講演を頂いた。なお、神戸新聞社は COC+事業の推進組織「ひょうご神戸プラットフォーム」の事業協働機関である

安心安全な地域社会領域からは 3 年間の活動についてまとめの報告を行った。当初、報告はパネルでの展示を企画していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため会場を変更することになり、展示から講演へ報告形式を変更して実施した。

(2) 概要

日 時：2020年3月14日（土）午後2時～午後5時

参加者：82名（会場 司会1名、講師2名、運営5名、動画配信登録74名）

プログラム：

①都市安全研究センターオープンゼミナール

②COC+事業これまでの取組／まとめの報告

主 催：神戸大学都市安全研究センター
神戸大学減災デザインセンター
神戸大学未来世紀都市学研究ユニット

共 催：ひょうご神戸プラットフォーム協議会

(3) プログラム内容とまとめ

阪神・淡路大震災25年目の振り返りが学術研究と新聞報道、それぞれの立場からなされた。長尾都市安全研究センター長より阪神・淡路大震災が耐震工学分野へ与えた影響とその後の進歩について、データを基に議論がなされた。神戸新聞社の長沼報道部長からは次なる巨大災害への備えについて新聞社の立場から講演がなされた。神戸新聞社の編集局社員のうち7割は阪神・淡路大震災後に入社している。そのため、受け手との新たなコミュニケーションをいかに作り上げ、震災を知らない世代へ伝えられているのか、それらの試みが、震災前の地震予測報道から2020年までの新聞記事とあわせて紹介された。

COC+安心安全な地域社会領域の3年間の活動については、北後明彦教授と領域コーディネーターから3年間のまとめと地域連携事業の成果が報告され関係者への感謝が述べられた。

本事業は、神戸市危機管理センターにおいて、オープンゼミナールとパネル展示の2つのプログラムで企画されていたが、日本政府から2月26日に新型コロナウイルス感染拡大防止対策として人の集まるイベントの中止・延期又は規模縮小等の対応要請が出たため開催形式を変更した。会場を神戸大学百年記念館（六甲ホール）へ移動し、COC+安心安全な地域社会領域の報告はパネル展示から講演へと形式変更した。当日の会場は「神戸大学主催の各種行事等について」（2020年2月27日）の指示に沿って、数名のスタッフと感染拡大防止の措置をとりながら設営した。講演は安全確保のため、講師承諾のもと、登録希望者のみが視聴できるYouTubeでのライブ動画配信形式とした。参加者からの質問・コメントは視聴中にEメール（open@rcuss-usm.jp）で受付ける形で対応し、双方向による質疑応答が活発に行われた。

(4) 詳細

①神戸大学都市安全研究センターオープンゼミナール

日 時：2020年3月14日（土）午後2時～午後4時45分

会 場：神戸大学百年記念館（六甲ホール）

司 会：北後明彦 神戸大学都市安全研究センター教授

動 画：ライブでYouTubeにて限定配信

参加者：82名

共 催：神戸市危機管理室、神戸市消防局

後 援：兵庫県

1. 「阪神淡路大震災を踏まえて～耐震工学の変遷と将来への教訓～」
長尾毅 神戸大学都市安全研究センター教授
2. 「『伝える』は『備える』～次の世代、次の災害に生かす～」
長沼隆之 神戸新聞社編集局報道部長

①オープンゼミナール 1



①オープンゼミナール 2



①会場内は無聴衆で実施



②COC+事業 まとめ報告

日 時：2020年3月14日（土）午後4時45分～午後5時

会 場：神戸大学百年記念館（六甲ホール）

司 会：北後明彦 神戸大学都市安全研究センター教授

動画配信等の技術提供：ピニェイロ アベウ タイチ コンノ 神戸大学大学院工学研究科助教

動 画：ライブでYouTubeにて限定配信

参加者：82名

1. 「安心安全な地域社会領域 これまでの取組／まとめ報告」
北後明彦 神戸大学都市安全研究センター教授
2. 「学生・市民のアクティブラーニング『伝えて、学ぶ』の取組」
山地久美子 神戸大学地域連携推進室学術研究員

②司会・COC+事業の報告 1



②COC+事業の報告 2



②講演の録画と動画配信



4. 都市安全研究センターオープンゼミナール COC+書籍執筆者 講演シリーズ(執筆者のみ)

(1) COC+書籍執筆者 講演シリーズ — 実施の経緯

神戸大学の COC+事業の 5 領域（「歴史と文化」「自然と環境」「子育て高齢化対策」「安心安全な地域社会」「イノベーション」）では、それぞれの領域が取組んできた地域づくり等の内容を含むテキストシリーズ「地域づくりの基礎知識」が神戸大学出版会から出版されている。

安心安全な地域社会領域では 2019 年 3 月にシリーズ 4 冊目の『災害から一人ひとりを守る』（北後明彦・大石哲・小川まり子編）をまとめ、出版した。本書の目的と内容を広く伝えるため、2019 年度都市安全研究センターオープンゼミナールでは一部のプログラムにテキストシリーズを組み込む形で執筆者による講演を企画した。

(2) 詳細

司 会：北後明彦 神戸大学都市安全研究センター教授

会 場：

神戸市危機管理センター（4号館）（2019年5月18日、6月15日、8月24日、9月14日、11月16日、12月21日、2020年1月25日、2月22日）

神戸まちづくり会館（台風のため日程・会場変更）（2019年11月30日）

神戸大学百年記念館（新型コロナウイルス感染拡大防止対策で会場変更）（2020年3月14日）

2019年5月18日（土）

- ① 北後明彦 神戸大学都市安全研究センター教授（第1章）
「地域と災害 <地域づくりの基礎知識 災害から一人ひとりを守る>」
- ② 佐々木和子 神戸大学地域連携推進室特命准教授（コラム）
「災害を未来に伝えるために」

2019年6月15日（土）

- ③ 津久井 進 弁護士・日本弁護士連合会災害復興支援委員会委員長（コラム）
「災害後の弁護士による支援」
- ④ 野崎 隆一 NPO法人神戸まちづくり研究所理事長（コラム）
「阪神の住民主体のまちづくりを東日本・熊本で～支援のあり方」

2019年7月20日（土）

- ⑤ 藤田一郎 神戸大学大学院工学研究科教授（第2章）
「兵庫県の水害～都賀川・千種川・丹波～」

2019年8月24日（土）

- ⑥ 日比野純一 特定非営利活動法人エフエムわいわい理事（コラム）
「防災を唱えることから始めないコミュニティ防災～インドネシア・ムラピ火山地域からの学び」

2019年9月14日（土）

- ⑦ 曾良一郎 神戸大学大学院医学研究科精神医学分野教授（第3章）
「大規模災害時のこころのケア」
- ⑧ 西山 隆 自衛隊中央病院 救急科部長（コラム）
「大規模災害時の多数傷病者対応」

2019年11月16日（土）

- ⑨ 岩田健太郎 神戸大学都市安全研究センター教授（コラム）
「感染リスクとエビデンス」



神戸市危機管理センターでの講演

2019年11月30日（土）（台風で10月から延期開催）

- ⑩ 富士原健斗 神戸大学学生震災救援隊 代表（神戸大学生）（第6章）
伊庭駿 神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti 代表（神戸大学生）
東末真紀 神戸大学学生ボランティア支援室ボランティアコーディネーター
「学生ボランティアによる被災地支援の実状と現場での受け止め」
- ⑪ 吉椿雅道 CODE 海外災害援助市民センター事務局長（第7章）
「世界の災害と NGO による海外の被災地支援」

2019年12月21日（土）

- ⑫ 紅谷昇平 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科准教授（第4章）
「地域社会における災害対応のガバナンス」
- ⑬ 豊田利久 神戸大学社会システムイノベーションセンター特命教授／神戸大学名誉教授（コラム）
「地震発生直後の被害額推計と応急対応の意思決定」

2020年1月25日（土）

- ⑭ 大石哲 神戸大学都市安全研究センター教授（編者・コラム）
「住む土地を理解して防災対策」

2020年2月22日(土)

- ⑮ 金子由芳 神戸大学大学院国際協力研究科教授 (第5章)
「被災者主体の復興まちづくりへ向けて～法制度の課題～」
- ⑯ 室崎益輝 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科長 (第11章)
「事前復興と復興ビジョン」

2020年3月14日(土) 新型コロナウイルス感染症対策のため動画配信

- ⑰ 長尾毅 神戸大学都市安全研究センター長・教授 (コラム)
「阪神淡路大震災を踏まえて～耐震工学の変遷と将来への教訓～」
- ⑱ 長沼隆之 神戸新聞社編集局報道部長 (コラム)
「『伝える』は『備える』～次の世代、次の災害に生かす～」

①代表編者 第1章



⑬編者 コラム



⑧コラム



⑦第3章



②コラム



④コラム



⑩第6章



⑩第6章



⑩第6章



⑤第2章



⑬コラム



③コラム



5. 都市安全研究センターオープンゼミナール 東北編 阪神淡路大震災・東日本大震災の地域連携

(1) 「海外から見た東日本大震災の経験記録と保存」－ 実施の経緯

International Perspective Recording 311 Tsunami Disaster and Experiences

東日本大震災の津波被災地岩手県・宮城県・福島県では復興事業が進んでいる。土地地区画整理事業、防災集団移転促進事業等の民間住宅用宅地が 99%近く整備され、災害公営住宅の整備は宮城県・福島県において完了し、岩手県は 2020 年度末の完了を予定している。復興事業が進むに伴い、被災地では住民からもそれまでの経験や災害への備えを世界へ伝える活動が意識され始めている。

東日本大震災復興対策本部が 2011 年 6 月に決定した「東日本大震災からの復興の基本方針（平成 23 年 8 月 11 日東日本大震災復興対策本部決定）」の中では、「災害の経験や復興の過程で得た知見や教訓を国際公共財として海外と共有する」と明示され、国際的発信が意識されている。その後、2016 年 3 月 11 日に閣議決定された『復興・創生期間』における東日本大震災からの復興基本方針の中に「東北観光復興元年」として、インバウンド促進が盛り込まれている¹⁾。被災地では災害後に数々の問合せがあり、自治体によっては観光協会等を通じて視察対応を始めていた。ほどなくして住民の中にはそれを受けて災害の体験を語る語り部として活動していた地域もある。被災地において震災・津波伝承の社会的、経済的な重要性が増してきて、国土交通省東北地方整備局は、岩手県、宮城県、福島県の震災伝承施設等をつなぐ登録制度を創設し、東日本大震災の教訓伝承と防災力向上への貢献と、来訪者との交流による地域活性化という 2 つの構想を基に、「3.11 伝承ロード」地図の整備、モデルルートや伝承ツアーを企画した²⁾。

住民は、国、自治体や経済界の動きにかかわらず、災害語り継ぎ・語り部活動をどのように展開するか考えてきている。そこで阪神・淡路大震災の 25 年の経験とニュージーランドの復興状況を伝え、東日本大震災のこれからのまちづくりに活かすきっかけとするため、宮城県南三陸町において神戸大学都市安全研究センターオープンゼミナール東北版を開催した。

(2) 都市安全研究センターオープンゼミナール アウトリーチ 2 概要

日時 2019 年 10 月 24 日（木）午前 10 時 15 分～午後 1 時 オープンゼミナール
場所 宮城県南三陸町 南三陸ホテル観洋 1 階 大潮の間
司会 北後明彦 神戸大学都市安全研究センター教授
対象 住民、地域団体、企業、神戸大学・東北大学教職員・院生
参加者 35 名程
主催 神戸大学都市安全研究センター
神戸大学減災デザインセンター
神戸大学未来世紀都市学研究ユニット



共催 ひょうご神戸プラットフォーム協議会
協力 南三陸町観光復興協議会 南三陸ホテル観洋
神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室
科研費基盤研究 B 「被災者支援レジーム／復興まちづくりの国際比較研究」

(3) プログラム内容とまとめ

本事業は 3 つの視点でプログラムを構成した。その一つは、2011 年の同時期に起こったニュージーランド・クライストチャーチ地震と東日本大震災の災害復興の国際比較である。二つ目は東日本大震災、阪神・淡路大震災被災地での語り部や伝承活動にむけたニュージーランド、米国、ドイツ、イタリア出身の研究者からの所見である。三つめは、米国、インドネシアなど海外の震災遺構や防災教育にかかる施設の取組から考える日本の語り部活動の特徴と課題の検討である。

Rosemary Du Plessis 神戸大学都市安全研究センター外国人客員教授の講演では社会学の立場から語り継ぎの分析と住民が主体として記録を残す重要性が示された。

カンタベリー大学では2011年2月のクライストチャーチ地震後に災害研究「Quake Studies」³⁾を全学プロジェクトとして立上げられていて、Du Plessis 客員教授らが関わる「Women's Voice プロジェクト」を含む、大学関係者、住民や市民団体の災害後の様々な活動記録が所収されている⁴⁾。

Elizabeth Maly 東北大学災害科学国際研究所准教授は米国ハワイ州の太平洋津波博物館やインドネシアのアチェ津波博物館等、海外被災地での記録保存の取組を紹介し、積極的な災害の語り部活動は日本独特な取組であり、施設と語り部の双方が携わる事の重要を指摘した。

阪神・淡路大震災の被災地神戸市や淡路市では当時の経験や復興の過程を伝える語り継ぎ活動が続いている。山地は1995年から現在まで語り部や研修受入れがどのように取組まれ、継続してきているのか、東日本大震災後の災害語り部や全国被災地語り部シンポジウム、国内外の語り部ネットワーク活動の紹介とあわせて、被災者が主体として活動するための仕組みづくりの必要性と政府による語り部基金の創設を提案した。

気仙沼観光コンベンション協会の Nishant Annu 職員からは復興まちづくりに各地域の特性を生かして、「食」を中心とした国際的なアプローチの必要性示された。これらの講演に対する質問やコメントは意見交換会で進められた。

Why tell, record and share disaster stories? 何故 災害を語り、記録し、共有するのか

- **For the tellers** – a way to express and understand grief/loss/trauma
語り部：悲しみ、喪失、トラウマを咀嚼し、表現する方法
- **For those who died/were injured** – a way to respect, honor and remember them
亡くなった、負傷した方：尊重、敬意を払い記憶するための方法
- **For neighborhoods, communities** – a way to share and connect
近隣、コミュニティ：共有し、つながるための方法
- **For the future** – to communicate, to learn from disasters, to record for posterity
未来へ：子孫のために記録し、災害を学び、伝えるため

Du Plessis 客員教授 講演 PPT

(4) オープンゼミナール詳細

挨拶 阿部隆二郎 南三陸町観光復興協議会会長
講演

1. 「Recording, Sharing and Learning from People's Disaster Stories in 311 Tohoku, Japan and 222 Canterbury Earthquake, New Zealand」

「東日本大震災とニュージーランド・カンタベリー地震の経験から考える記録と共有」

Rosemary Du Plessis ローズマリー デュ プレシス (通訳 山地久美子)

神戸大学都市安全研究センター客員教授／カンタベリー兼任准教授

2. 「海外の災害博物館」

Elizabeth Maly 東北大学災害社会科学国際研究所准教授

3. 「外国人に向けた気仙沼市の東日本大震災伝承活動」

Nishant Annu 気仙沼市観光コンベンション協会

4. 「阪神・淡路大震災、熊本地震の多様な災害語り部」

山地久美子 神戸大学地域連携推進室学術研究員

コメント

1. Gerster Julia 東北大学災害社会科学国際研究所助教

2. Fulco Flavia 東北大学災害社会科学国際研究所助教



(1) 意見交換会— 実施の経緯

意見交換会ではオープンゼミナールでの講演を受けて、復興まちづくりや語り部の未来について意見を交わした。これからは住民自身による記録が大切であり、多言語での情報発信等新たな活動展開の兆しがあり、それらを支える住民エンパワーメントを取入れた支援が求められる。

(2) 意見交換会概要

日 時 2019年10月24日(木) 午後1時～午後2時 意見交換会
場 所 宮城県南三陸町 南三陸ホテル観洋 1階 大潮の間
対 象 住民皆さん、地域団体、企業、神戸大学・東北大学教職員・院生、
参加者 35名程
主 催 神戸大学都市安全研究センター
神戸大学減災デザインセンター
神戸大学未来世紀都市学研究ユニット
共 催 ひょうご神戸プラットフォーム協議会
協 力 南三陸町観光復興協議会／南三陸ホテル観洋
神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室
科研費基盤研究B「被災者支援レジーム／復興まちづくりの国際比較研究」

(3) プログラム内容とまとめ

参加者全員の自己・活動紹介の後、意見が交わされた。東日本大震災後に始まった災害語り部の依頼数は9年の間に減少し、語り部の高齢化が指摘される。復興が進み、盛り土と造成によって街が新しい姿へと変わったことで津波被災が目に見えなくなり、語りで伝えることが難しくなっている。9年経ち、語り部の世代交代も現れている。新たに語り部を始めたきっかけや活動を休止するあるいは再開する等、それぞれ個人の社会状況によって異なり、それらを受け止めつつ地域として継続するため、何らかの形で活動を支援する仕組みと組織体制の構築が提案された。

講演 1



講演 2



講演 3



講演 4



コメント 1



コメント 2



意見交換会



意見交換会



6. 「伝えて、学ぶ」見て歩き会／SEEK OUT の取組 阪神・淡路大震災から防災・減災を考える

(1) 兵庫の歴史の中で阪神・淡路大震災から防災・減災を考える — 実施の経緯

— ひょうご・淡路の 歴史、住宅、生活 ... 地元を歩きましょう

神戸大学では 1,300 名を超える留学生が学んでいる。日本の学生と留学生が兵庫各地域の理解を深め、防災・減災対策を現場から考える場として「見て歩き会／SEEK OUT」を日本語と英語の二つの言語で実施した。

(2) 第 1 回見て歩き会／SEEK OUT I 兵庫県淡路市 概要

日 時 2019 年 10 月 26 日 (土) 午前 8 時 30 分～午後 5 時 30 分

富島地区震災復興土地区画整理事業まちあるき
野島断層保存館視察／災害語り部

場 所 旧北淡町富島地区
野島断層保存館

対 象 神戸大学教員、院生、研究者、住民の皆さん、

参加者 19 名

主 催 神戸大学都市安全研究センター
神戸大学減災デザインセンター
神戸大学未来世紀都市学研究ユニット

共 催 ひょうご神戸プラットフォーム協議会
北淡震災記念公園野島断層保存館

協 力 神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室

科研費基盤研究 B 「被災者支援レジーム／復興まちづくりの国際比較研究」

プログラム：

- ①兵庫県淡路市富島地区（震災復興土地区画整理事業）まちあるき
- ②北淡震災記念公園 野島断層保存館
- ③災害紙芝居「阪神・淡路大震災 まーくんが伝えたいこと」
- ④災害語り部

—Get up-to-date Awaji Is. & Hyogo

Date : October 26, 2019 Saturday

Places : Awaji-city “the Former name of Hokudan-town”

Visiting : Land Readjustment for Recovery Areas at TOSHIMA District in Awaji-city
Nojima Fault Preservation Museum

Disaster Storyteller Picture-story

version “Something to Tell from Ma-kun the Great Hanshin-Awaji Earthquake”

Disaster Storyteller

Hosted : Research Center for Urban Safety and Security, Kobe University

Center for Resilient Design, Kobe University

Multidisciplinary Integration for Resilience and Innovation: MIRAI,
Kobe University

Co-hosted : COC+ Hyogo-Kobe Platform Association

Nojima Fault Preservation Museum

Support : Promotion Office for Disaster Science and Quake Restoration Support,
Kobe University

JSPS (B) 16H05666

(3) -1 第1回見て歩き会／SEEK OUT I プログラム内容とまとめ

阪神・淡路大震災の被災から復興に至る過程を被災現地において学び、防災・減災を考える機会として実施した。淡路島で被害の最も大きかった富島地区の震災復興土地区画整理事業地を北淡震災記念公園野島断層保存館や住民に案内頂きながら歩いた。野島断層保存館の見学や阪神・淡路大震災の経験をモデルにした紙芝居、災害語り部の話と意見交換会から、阪神・淡路大震災の実像を学ぶとともにコミュニティのソーシャルキャピタルがいかに防災・減災において重要で、記録や語り部による知識継承が役立っていることを学んだ。

(4) -1 第1回見て歩き会／SEEK OUT I 詳細

講師等：Lectures

池本啓二	IKEMOTO Keiji	野島断層保存館部長
岡田美紀	OKADA Miki	野島断層保存館課長
森康成	MORI Yasushige	北淡震災記念公園震災の語り部ボランティア
北後明彦	HOKUGO Akihiko	神戸大学都市安全研究センター教授
山地久美子	YAMAJI Kumiko	神戸大学地域連携推進室学術研究員

①富島地区で講師からの説明



①富島地区で講師からの説明



②野島断層保存館内の見学



②紙芝居による災害語り部



②住民の災害語り部



集合写真



7. 「伝えて、学ぶ」見て歩き会／SEEK OUT の取組兵庫の歴史から防災・減災を考える

(1) 兵庫の歴史の中で防災・減災に取り組む — 実施の経緯

—ひょうご・KOBEの歴史、住宅、生活... 地元を歩きましょう

阪神・淡路大震災の激甚被災地の一つである、神戸市長田区を歩き、地域の歴史と現在の生活を直接学ぶ場として日本語と英語の二つの言語で開催した。新長田駅南地区では震災復興市街地再開発事業が継続していて、地域によっては「復興」が今も続いている様子が、住民との交流を通じてみえてきた。

(2) 第2回見て歩き会／SEEK OUT 概要

日時：2019年11月17日（日）午前9時30分～午後3時

参加者：31名（神戸大学教職員、学生、NPO・自治会関係者、住民皆さん）

プログラム：

- ①震災復興土地区画整理事業／震災復興市街地再開発事業、火災から免れた地域
- ②商店街、自治会・住民皆さんとの交流、たかとりコミュニティセンター訪問

主 催：神戸大学都市安全研究センター
 神戸大学減災デザインセンター
 神戸大学未来世紀都市学研究ユニット
 共 催：ひょうご神戸プラットフォーム協議会
 協 力：NPO 法人神戸まちづくり研究所
 NPO 法人エフエムわいわい
 神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室
 科研費基盤研究B「被災者支援レジーム／復興まちづくりの国際比較研究」

Date : November 17, 2019 Sunday

Places : Nagata-ward, Kobe-city, Hyogo

JR shin-nagata North Land Readjustment for Recovery Areas

JR shin-nagata South Re-development for Recovery Areas

Hiyoshi 5 Residential Community

Takatori Church (BAN Shigeru Architects)

(3) 見て歩き会／SEEK OUT プログラム内容とまとめ

阪神・淡路大震災から 25 年経ち商店街、住宅地等様々な場所で世代交代が起きている。神戸市が 2003 年に完了予定としていた新長田駅南地区復興市街地再開発事業は約 20 ヘクタール、2,710 億円規模で現在まで続いている。まちの活性化対策として 2019 年には兵庫県と神戸市の新長田合同庁舎が整備される一方で再開発ビルでは空き店舗が増えてきていて、事業にかからなかった他の地域との違いも様々な形で鮮明になっている。

事業で歩いた地区には南海トラフ巨大地震での津波浸水予測エリアが含まれていて、阪神・淡路大震災では直接的な被害が少なかった地域において住民が防災まちづくりに取り組んでいる話を直接伺うことができた。

日吉 5 丁目は阪神・淡路大震災によって建物の倒壊と火災で被害が大きかった地域の一つであるが自治会が主体となり毎年 1 月 17 日には慰霊祭を執り行い、防災・減災活動に取り組んでいる。長田区は人口の高齢化が進んでいて、それは様々な活動に影響している。居住者の中で外国籍、中でも韓国籍・朝鮮籍の方の比率が高い。代表的とされるケミカルシューズ（合成皮革で作られた靴）産業の推移もあり、今後、どのように経済の活性化とまちづくりを進めていくかが課題である。地域において、災害復興による変化、時代による変化の様々な課題を直接学び、復興の難しさを考える機会となった。

①講師から当時の都市計画の話



②講師からの紹介



①大正筋商店街被災者の語り部



③日吉 5 丁目自治会との交流



③FM わいわいからの説明



③鷹取教会(坂茂設計)



(4) 見て歩き会／SEEK OUT 詳細

- ①新長田駅北地区 震災復興土地区画整理事業
- ②新長田駅南地区 震災復興市街地再開発事業、被害を免れた地域
- ③鷹取東第一、第二地区 震災復興区画整理事業、日吉 5 丁目自治会、たかとり教会

講師等：Lectures

辻信一	TSUJI Nobukazu	NPO 法人神戸まちづくり研究所
日吉 5 丁目自治会長	菅秋利、自治会みなさん	SUGA Toshiaki and Hiyoshi 5 Residents
金千秋	KIM Chiaki	NPO 法人エフエムわいわい
北後明彦	HOKUGO Akihiko	神戸大学都市安全研究センター教授
山地 久美子	YAMAJI Kumiko	神戸大学地域連携推進室学術研究員

8. まとめにかえて一阪神・淡路大震災の 25 年を教育・学術研究にどう伝え、活かすのか

本事業は阪神・淡路大震災、東日本大震災や熊本地震被災地の住民、学生、教職員と共に取り組んできた。2019 年度の事業では「これから必要と考える 4 つの取組」として挙げたうちの最後の一つを実現することができた。

- 学生が阪神・淡路大震災被災地に足を運び、その声を直接聞く機会をつくる
- 阪神・淡路大震災の後に発生した災害被災地の被災者・住民の方の話を直接聞く機会をつくる
- 大学において阪神・淡路大震災被災者・住民の方に講義・講演してもらい学生に伝えていく
- 教職員と学生と一緒に地元地域・被災地でのボランティア活動に取り組む

ここでは被災地で取組んだ 2 つの活動を紹介してまとめとしたい。一つは前述した東日本大震災の復興と防災・減災を国際的な視点から考える場として開催したシンポジウム「海外から見た東日本大震災の経験記録と保存：International Perspective Recording 311 Tsunami Disaster and Experiences」と一連の取組である。

東日本大震災被災地では 2019 年 3 月に、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館と名取市震災メモリアル公園が宮城県に、9 月には岩手県陸前高田市に岩手県の東日本大震災津波伝承館が開館した。10 年目を迎える 2020 年には石巻南浜津波復興祈念公園（宮城県石巻市）、南三陸町震災復興祈念公園（宮城県南三陸町）、福島県復興祈念公園（福島県双葉町、浪江町）等が正式開園される予定である。ここで被災者自らの語り部が一層大切になっている。これまで長期にわたって取組んできた地域住民自身がそのために何が必要であるのか、10 年に向けて語り部同士の交流や情報交換が工夫されてくる中、外国人研究者の協力を受けてオープンゼミナールと意見交換会を開催した。今後、住民や地元団体が継続できる体制づくりにむけて協力していく予定である。

もう一つは阪神・淡路大震災 25 年に向けた語り継ぎの現状調査と提言である。その一つに毎日新聞と実施した調査が挙げられ、そこでは阪神・淡路大震災被災地で語り継ぎ活動に取り組む団体へ、これまでの活動内容や今後の活動予定について尋ね、現状を明らかになるとともにこれからの活動への課題がみえてきた。

<調査の概要>

期 間：2019 年 10～11 月

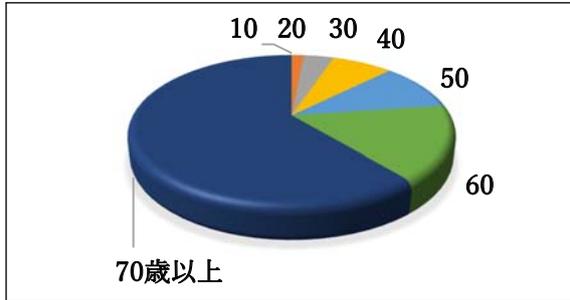
調 査：山地久美子・毎日新聞社が共同で実施

概 要：共通の質問紙調査を依頼し、文書回答を基に対面・電話インタビューを実施

対 象：14 団体（1 団体は対象外との回答）

調査に回答頂いた13団体

阪神・淡路大震災の語り部 年代別(10団体)



NPO 法人神戸まちづくり研究所／神戸復興塾
 NPO 法人 FM わいわい
 NPO 法人阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り
 NPO 法人まち・コミュニケーション
 NPO 法人ふたば
 1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会
 K-TEC (神戸防災技術者の会)
 語り部神戸 1995
 神戸の絆 2005
 (株) 神戸ながた TMO
 野村防災研究所
 人と防災未来センター語り部
 北淡震災記念公園震災震災の語りベボランティア
 (野島断層保存館内)

阪神・淡路大震災の被災地には今も全国から修学旅行生、防災研修の自治会や自主防災組織、行政関係者、個人が訪れている。調査に回答頂いた団体には、被災当時の支援者や建築・都市計画等の専門家らが今も継続して活動する団体、北淡震災記念公園震災震災の語りベボランティア(野島断層保存館内)のような地域住民の集まり、震災で犠牲になった方のご遺族による語り部を続ける団体、さらには当時活動した行政職員のOBの集まる団体、消防吏員、まちづくりの企業もある。語り継ぎの内容や形式は様々で住民の災害直後の被災体験、炊出し体験、あるいは被災者や専門家、行政OBらの震災復興土地区画整理事業や再開発等を含めた復興に関する研修、慰霊・追悼としての取組、ご遺族が語り続ける活動がある。今後、活動を継続するかどうかについては13の団体全てが「語り継ぎを継続していく」と回答し、新たに活動する人や若い世代を探す努力が続けられている。

団体によっては形態が変化、停止、進化していて、神戸まちづくり研究所／神戸復興塾やFMわいわいの様に震災当時から活動を新たに展開しながら続いている団体があれば、活動を停止・解散した団体もある。その一方で人と防災未来センター(2002年)やふたば(2010年)のように行政が関わり、新たな施設ができたことで始まった語り部や研修活動がある。

語り部の受入れ件数は、人と防災未来センターができた02年に1000件以上増加した。その後、受入れ件数は減少したが、11年に東日本大震災が起こったことで、件数が一時的に増えている。その理由は様々考えられるが、他の地域で起る災害が阪神・淡路大震災被災地の語り継ぎ活動へ影響したことは明らかである。

ここで13団体のいずれもが課題として挙げているのが、語り部の高齢化だ。10団体の136名のうち8割近くが60歳以上で、性別では男性が7割、女性が3割である。これらの統計からは、語り継ぎの継続を考える上では、阪神・淡路大震災を経験した20代後半から30代、40代、50代の方々、そして新たに女性が活動できるような仕組みづくりが有効であろう。

中でも急がれるのは、災害を経験していない人や震災後に生まれた世代へどのように伝え、その先に繋げていくかである。神戸市中央区の神戸市役所の南側に位置する東遊園地では毎年、地震発生時刻の午前5時46分に追悼行事「阪神淡路大震災1.17のつどい」(阪神淡路大震災1.17のつどい実行委員会)が開かれる。2020年1月17日には午前5時46分の追悼時刻までに会場に到着できるよう市民からの要望を受けて、神戸市は市営地下鉄、ポートライナー、六甲ライナーの午前4時台出発の早朝臨時列車を運行した。これは20年目の2015年に続き2度目の特例である。

このように2020年の1月17日が特別な「25年目」として捉えられているのは当日の朝刊紙面からもみえてくる。全国五大紙の朝日新聞・読売新聞・毎日新聞・日本経済新聞・産経新聞の紙面はいずれも阪神・淡路大震災25年にかかるトップ記事で始まり、様々に特集が組まれている。地元紙の神戸新聞は「阪神・淡路大震災きょう25年 災後の歩み信じて」と題する記事で始まり、「あの日を語ろう」と題する12頁の震災特集第2朝刊が折り込まれている。

次の写真は 2020 年 1 月 17 日当日の阪神・淡路大震災被災地の神戸市長田区、野島断層保存館、淡路市富島地区の様子で、本事業に協力頂いている地域や団体である。

神戸市長田区の「日吉 5 丁目自治会」では復興事業が完了し住民が戻ってきてから自治会として慰霊祭を続けている。午前 5 時 46 分が近づくと住民が集いはじめ小学生や中学生くらいの子供たちの姿もあり、追悼を通じて災害の経験、復興を地域に伝え残されている。また、日吉 5 丁目自治会は新潟県中越地震の被災地山古志村（長岡市）との被災者交流を始め、一時期中断を経て、今も 1 月 17 日には山古志村の被災者らが日吉町ポケットパークを訪れる。

カトリックたかとり教会で震災後に始まった活動に連なる「1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会」は毎年 JR 新長田駅前広場で追悼行事を開催する。市民が参加しやすいよう追悼の灯籠の点火は 12 時間後の「午後 5 時 46 分」である。朝から点灯までの間に大学生や地域の子供たちがボランティアで会場を設営し、後片付けまでして帰る。その日に参加者は残った竹灯籠を持ち帰って翌日から募金を始め、来年の追悼行事のための資金集めが始まる。また、11 月には地域の小学校で実行委員らによる災害経験を伝え、その後には子供たちと一緒に 1 月 17 日のためのロウソクを作る。この一連の取組の全てが地域に根付いた語り継ぎ活動である。

淡路市の北淡震災記念公園野島断層保存館では毎年、午前 5 時 46 分に施設内慰霊碑の前でフェニックス合唱団から鎮魂の歌が捧げられる。2020 年には午後に「野島断層活用フォーラム」が淡路市教育委員会主催で 20 年ぶりに開催された。

震災復興土地区画整理事業が行われた富島地区では、地域の生活道路、中道に 1 キロに渡って追悼の竹灯籠が初めて灯された。この 25 年目を迎えて初めての取組は、富島の住民自らが行っている。

住民が主体の活動にこそ、新たな、そして継続する力が生まれ、次の世代、他の地域へ伝える残すきっかけとできる。このような住民自らが 25 年目にはじめた取組は、東日本大震災、熊本地震等の続く被災地の皆さんへ伝えていきたい。

① 1 月 17 日午前 5 時半 神戸市長田区日吉 5 丁目自治会慰霊祭



② 午後 1 時過ぎ JR 新長田駅前学生ボランティアによる準備



③ 午後 8 時過ぎ JR 新長田駅前通勤・通学帰り慰霊の火を灯す



④ 野島断層保存館では午後に野島断層活用フォーラムを開催



⑤ 富島地区の中道に初めて灯された追悼の竹灯籠



⑥ JR 新長田駅前に一年に一度復活するコミュニティ FM ラジオ「エフエムわいわい」



1 月 17 日の追悼行事には毎年、市民、支援者、行政関係者が様々な形、思いで集う。その中には、数多くのメディア関係者の姿がある。2020 年の 1 月 17 日も神戸市、淡路市の各所で、新聞記者、放送局関係者に会っている。記者らのお蔭で私たちは各地の様子を当日のニュース、夕刊、翌 18 日の朝刊で知る事ができる。

メディアにおいても災害を経験していない、あるいは震災後に生まれた世代へ伝えていく難しさがあり、神戸新聞社の長沼報道部長もその事を講演で指摘された。今年の1月、NHKとMBSでは、神戸新聞社の災害報道を担当する記者らがどのように阪神・淡路大震災を学び、報道しているのか、若い記者に密着した特集番組が組まれ、放送された⁵⁾。本事業でも、金旻革記者、竹本拓也記者、井沢泰斗記者らにいくつかの記事を掲載してもらっている。記者らは、「見て歩き会／SEEKOUT」等のプログラムを一緒に歩いて、長時間にわたる丁寧なインタビューや意見交換を経て記事をまとめてくれている。都市安全研究センターについては、1月17日の第2朝刊に1997年に始まったオープンゼミナールについて会場の様子と北後明彦教授のコメントが掲載されている（神戸新聞2020年1月17日第2朝刊2面）。

共同で語り継ぎ・語り部調査を行った、毎日新聞社の反橋希美記者は、記事の中で自身も震災の揺れの記憶があるとしつつメディアに身を置く者として、言葉を受け取ったら、その時に動かされた気持ちとともに「次」の人に継ぎたい「1・17」を自分の言葉で伝えることそれが明日への備えにつながると信じていると記し、大きな被災体験がなくとも学ぶ事で伝える力が生まれる事を教えてくれている（2020年1月17日朝刊14面 記者の目）。

東日本大震災や熊本地震被災地ではどうか。被災から9年が経過した3月、東日本大震災被災地では震災を知らない子どもが増えていることがニュースとなった（河北新報2011年3月11日）⁶⁾。本事業でいくつかのプログラムを日本語と英語の二言語で行ったのは、外国人を含めた誰もが言語や文化の垣根なく参加し、共に防災・減災を学び、次の取組へつながるきっかけを創り出したかったためである。3月14日に開催した神戸大学都市安全研究センターオープンゼミナール／兵庫の防災・地域連携フォーラムⅢは新型コロナウイルス感染拡大防災対策のために無聴衆、動画配信で実施された。その後、YouTubeやZOOM等を用いたリモートでの交流が一般化してきている。このような時代であるからこそ日本の防災・減災を世界へ垣根なく伝え、相互に学ぶ取組が重要になってきて、本事業に関わった学生たちが役割を果たしてくれる事も期待される。

被災経験の有無にかかわらず、誰もが語り継ぎや防災・減災教育に触れ、伝えられ、学び、自身が新たに伝えられる人になる機会がきつとくる。そのための教育、学術研究の場を様々な形で提供する事が大学、研究者ができる語り継ぎ活動である。

安心安全な地域社会を目指し兵庫の災害対応力を高め、実践に繋げ、これからの防災教育・人材育成を推進するためにも、本事業で得た知見を被災地、日本社会、世界で双方向の教育、研究、社会貢献面に活かしていきたい。

謝辞：本事業の実施に際し兵庫県神戸市・淡路市の皆さま、北淡震災記念公園・北淡震災記念公園震災の語りべボランティア、NPO法人神戸まちづくり研究所、NPO法人エフエムわいわい、神戸市長田区日吉5丁目自治会、（宮城県）南三陸町観光復興協議会、南三陸ホテル観洋、東北大学災害科学国際研究所の研究者、神戸大学都市安全研究センター教職員ほか、多くの方より甚大なご協力を受けました。ひょうご神戸プラットフォーム協議会、神戸大学減災デザインセンター、神戸大学未来世紀都市学研究ユニットより事業開催へご支援を頂きました。また、活動の一部に神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室、日本学術振興会科学研究費補助金 課題番号16H05666の助成を受けました。ここに記して深謝致します。

著者： 山地 久美子、神戸大学地域連携推進室、学術研究員

付録 1：本事業の参加者アンケート（抜粋）

①市安全研究センターオープンゼミナール COC+書籍執筆者 講演シリーズ

毎月の講座準備も大変なことと思います。継続して開催されることに敬意を表したいと思います。地域づくり基礎知識執筆者のご講演も期待しています。
どの講演にも共通することですが被災された方の生の声、その声との交流や一緒に考えるプロセスの具体例を沢山聞いた所が今回のオープンゼミナールに参加して一番良かった点です。メディアではなかなか取り上げられない側面を垣間見ることができて勉強になりました。
バイリンガル（英語／日本語訳）のセミナーは良かったです。
被災者・災害体験者の声を聴き、「記録・保存・公開」することの大切さを教えて頂きました。ありがとうございます。
普段、本を読むだけでは得られない内容（知識）を知ることができました。
地域での実践をすることの必要性を感じました。
毎回、有意義な内容で役立っています。
災害は自然災害からテロまで多様で誰もが備えることが重要であると認識しました。
感染症について知見が広がった。科学的知見に基づいて判断することの大事さがわかりました。印象に残る言葉がありました。「科学ではなくて世論が決めている」
感染症とは本当はどういうものなのか自分が勘違いしていた部分を修正できる良い機会になりました。友人が家族にも話したい内容。
感染リスクは重要な事です。
ニュージーランドにおける人種的多様性の中、復旧・復興されていくプロセスについて丁寧にご説明があり、教養を深めることができました。
日本とニュージーランドの違いとして民族といったコミュニティが災害時の重要な対応を担っていると知った。
地区防災計画が進展していない現状／現状では推進してもあまり意味がないとの説明
連携型の地域防災の考察
貴重な被害額の推計の研究だと思う。

②都市安全研究センターオープンゼミナール アウトリーチ 2 阪神淡路大震災・東日本大震災の地域連携

デュ プレシス先生たちから海外での事例を紹介して頂く機会に参加できてとても良かったと思っています。震災被害を多くの方に伝える重要性は誰もが感じているのですが、その手段は様々です。当時のままを見せる「震災遺構」や「震災アーカイブ」の保存、そして当事者が話す「伝承」をどのように続けられるかを過去の時代や世界各地の取り組み方を聴いて、南三陸ではどのような形が良いのかを考えるきっかけにもなりました。 （ゲルスター先生から）「私たちは当事者ではないので話す事はできませんが、聴いたことや見たことを伝える事はできます」というフレーズは納得しましたし、素晴らしい表現だと思いました。（山地先生が）そこから世界中の語り部ネットワークづくりを提言され、（マリー先生が）博物館を中心に伝える方法もあると教えて下さいました。南三陸町の震災伝承館という施設や伝える手段、ひとはどうなるでしょう。 ニシャントさんは、震災を乗り越えた方々のストーリーも大事で、またお会いしたいと思わせる交流活動を続け、リピーターを増やすことを実践されています。情報交換したい。
ローズマリー デュ プレシス先生の詳細な表現で再認識..... ニュージーランドの「カンタベリー地震」直後、東日本大震災の津波で我が家を失い、ニュージーランドの「悲劇」は記憶の彼方に追いやられ..... 近年、全国そして身近で台風・豪雨の「水害」が連続し、報道は「上書き」を繰り返す。別々の時期や場所で誕生した被災地は、次々「記憶の果て」に塗り込められる。 「カンタベリー地震」に感じたことと同様なものが、そこに？
被災者・災害体験者の声を聴き「記録・保存・公開」することの大切さを教えて頂きました。
東日本大震災から学んだことは、「想定」は、計算上の「目安」に過ぎないこと。 「助かる」こと。助かって「助け、助け合う」ことを学びました。

③「伝えて、学ぶ」見て歩き会／SEEK OUT の取組 第 1 回見て歩き会／SEEK OUT I

(兵庫県淡路市(旧北淡町):Former Hokudan-town:Awaji-city, Hyogo Prefecture)

住民は他の人の命を救い震災後は全力的に復興事業を進め、地震の経験から被害を減らすため沢山の防災対策を講じました。人間は強いと思います。誰でも命を守るために防災知識を身に付けるべき。命を大切にしよう！

It is a great experience for me to visit Nojima Fault preservation museum and find out more about the Great Hanshin Awaji Earthquake. I suppose the government and the Japanese community have strong commitment to learn a lot from the past experiences so that they can prevent the next disaster more carefully. Moreover, I think it is a great idea to hear personal experiences from the people who affected by the disaster. The Storyteller part about Ma-kun is also such a touchy way to give a lesson for children or people about the impact of the Great Hanshin-Awaji Earthquake. Thank you giving me this interesting experiences.

Thank you very much for taking us to this field trip. It was very great experience. I am learning and am gaining new knowledges, especially how Hokudan community built back their livelihood better.

I learned a lot about the causes and conditions of the Great Hanshin Awaji Earthquake. It was also pleasantly surprised by the results of reconstruction in Toshima region.

It was a fresh experience for me. About the disaster knowledge I have is from TV show or Internet, so I have the stereo cognition about earthquake including the theoretical knowledge, the recovery site of fault and the experiences of earthquake. We cannot predict occurrence of earthquake or other disaster, what we can only do is the reduce loss of life and property by performing disaster drill, especially earthquake drill regularly.

Story telling is so amazing. It can improve children's awareness on how to protect themselves.

I am deeply moved by the fact that daily communication among neighbors could help to save live at the critical moment.

As a visitor from outside Japan, this visit to Awaji Island was significant in a number of different ways. There was a sense of connection with those who had experience this 1995 quake, because aspects of it were like the quakes experienced in the Canterbury region in 2010-11. What was different was exposure once again to the preservation of damage from the disaster. There was the exposed fault line, preserved, with the museum built around it. There was the house that was damaged but preserved as an example of the impact of the quake. There was a sculptural body of metal from Kobe city that illustrated the impact and strength of the quake. Much more costly effort in Japan goes into preserving evidence of damage as a form of memorializing disasters than is the case in New Zealand.

④「伝えて、学ぶ」見て歩き会／SEEK OUT の取組 第 2 回見て歩き会／SEEK OUT II

(兵庫県神戸市:Kobe-city, Hyogo prefecture)

街を歩きながら阪神・淡路大震災後の整然とした街並み、防災公園等の公共施設目の前にして、安全・安心かつアクセスしやすい街区だと感じました。一部に古い建物や市場がまだ残っていて昔ながらの現場も体験できて良かったです。

I learnt most on this fieldtrip from the visit to the Takatori Community Centre and will seek to pass on information about the centre to those who work at the Christchurch Resettlement Services and the Canterbury Refugee Resettlement and Resource Centre that also provide support for refugees and new immigrants. They also provide community-based support for people from different cultural backgrounds and respond to resettlement and acculturation issues as well as psychosocial and mental health needs.

付録 2：メディアでの発信 新聞記事掲載

神戸新聞	2019年5月21日朝刊 「社会変えて被害最小化を 神戸大教授ら防災をテーマに講演」 (北後明彦 神戸大学都市安全研究センター教授)
	2019年5月30日朝刊 「災害資料の保存」 (佐々木和子 神戸大学地域連携推進室特命准教授)
	2020年1月17日第2朝刊2面 阪神・淡路大震災特集 「神戸大の公開セミナー 市民向け 研究発表 250 回超」 (北後明彦 神戸大学都市安全研究センター教授)
	2020年3月28日朝刊3面 阪神・淡路大震災 25年 「震災人脈 災間を生きる 結び・次代へ 災害の悲しみ繰り返さない」 (山地久美子 神戸大学地域連携推進室学術研究員) https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/25/rensai/202003/0013228720.shtml https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/saikan/ (特集 URL)
三陸新報	2019年10月27日 「災害伝承 外国人視点で 研究者らが公開講座 (南三陸町)」 (Rosemary Du Plessis 神戸大学都市安全研究センター客員教授) (山地久美子 神戸大学地域連携推進室学術研究員)
河北新報	2019年11月22日朝刊18面 「災害の伝承 海外と共有 南三陸 神戸大など公開ゼミ」 (Rosemary Du Plessis 神戸大学都市安全研究センター客員教授) (山地久美子 神戸大学地域連携推進室学術研究員)
毎日新聞	2019年12月25日朝刊1面 (西日本版) 「阪神大震災 25年 語り部 6割 70歳以上 若い世代の育成急務 神戸大など調査」 (山地久美子 神戸大学地域連携推進室学術研究員) https://mainichi.jp/articles/20191225/ddn/001/040/001000c
	The Mainichi December 26, 2019 (Mainichi Japan) “Majority of Japan's 1995 Hanshin quake storytellers aged at least 70: study” (Kumiko Yamaji, Researcher, Office of Promoting Regional Partnership, Kobe University) https://mainichi.jp/english/articles/20191225/p2a/00m/0na/020000c
	2020年1月17日朝刊16面 希望新聞 「阪神大震災 25年 あの日から 9132日 工夫しニーズに対応 神戸大地域連携推進室・山地久美子学術研究員の話」 調査結果 https://mainichi.jp/articles/20200117/ddm/010/040/019000c
	2020年1月17日朝刊14面 記者の目 「阪神大震災から 25年 小さな声、紡いでいこう =反橋希美 (神戸支局)」 https://mainichi.jp/articles/20200117/ddm/005/070/011000c

参考文献・資料

- 1) 復興庁 <https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat12/sub-cat12-1/>
- 2) 『『3.11 伝承ロード』が動き出します』 <https://www.tohokuck.jp/notice/20190801/20190801.pdf>
- 3) Quake Studies <https://quakestudies.canterbury.ac.nz/>
- 4) Women's Voices: Recording women's experiences of the Canterbury earthquakes <https://quakestudies.canterbury.ac.nz/store/collection/228>
女性たちの災害時の記憶・記録をビデオや音声等で公開している
- 5) NHK 目撃! にっぽん「被災地」の新聞記者阪神・淡路大震災 25年」2020年1月26日
MBS 地元紙が語る「震災報道の意義」「伝え続けたい」遺族の言葉と思い...神戸新聞記者に密着 2020年1月14日
- 6) 『震災知らない子増えている』6割 被災地の小中、伝承学習の時間確保困難に 宮教大と河北新報調査

Actions of Regional Partnership to Realize a Safe and Secure Society Passing Down the Disaster Experiences to the Next Generation/Others and Learning Part III

Kumiko YAMAJI

Kobe University, as one of the representative universities of Hyogo prefecture, considers that experiences, knowledge, and findings related to disaster recovery from the Great Hanshin-Awaji earthquake are crucial for disaster response, in order to enhance natural disaster management and preparedness, given the risk of future disasters such as the Nankai Trough earthquake, flood damage, and so on. It is also important for university education and research in various forms to be able to make use of such information.

At the Office of Promoting Regional Partnership at Kobe University, there is an ongoing effort to realize a safe and secure society in collaboration with the Urban Safety Research Center, anchored in the Regional Partnership Project of the University Finding Point or so-called “COC+ project” proceeding.

In academic year of 2019, recommend the sharing of details of the third year of Actions of the Regional Partnership to Realize a Safe and Secure Society; Passing Down Disaster Experiences to the Next Generation/Others and Learning, which involves exchanges and discussions about one’s own disaster experiences in natural disaster-devastated regions, following the Great Hanshin-Awaji earthquake and the Great East Japan earthquake.

Hence Rosemary Du Plessis, Adjunct Associate Professor from Canterbury university in New Zealand where severe Canterbury earthquake happened on February 22nd, 2011 right before the Great East Japan earthquake, was invited as the visiting professor at RCUSS, we had conducted special programs at Hyogo prefecture and at Miyagi prefecture.

We are facing new normal life as with- and post- COVID-19. Academic exchanges between Japan and New Zealand will take crucial roles in the improvement of disaster response and preparedness in university education programs at Kobe university and for the people of Hyogo in many ways.

Author: Kumiko Yamaji, Researcher, Office of Promoting Regional Partnership, Kobe University

©2020 Research Center for Urban Safety and Security, Kobe University, All rights reserved.